

成瀬仁蔵と女子体育

—日本女子大学校の「容儀体操」—

片桐 芳雄（日本女子大学名誉教授）

Naruse Jinzo and Physical Education for Women: Japan Women's University and "Physical Exercises for Department"

Yoshio KATAGIRI (Professor Emeritus of Japan Women's University)

Abstract

This study aims to review the process that Naruse Jinzo, founder of Japan Women's University, studied in the United States, and decided the realization of the women's higher education in Japan. Furthermore, it discusses a reason and the actual situation that focused on physical education in Japan Women's University as follows:

Section 1 reviews the process that Naruse aimed at the realization of the women's higher education in Japan at the base of studying in the United States.

Section 2 discusses a view of Naruse on physical education, and gives light on particularly that he thought it was necessary to teach "the good manners exercises" such as Delsarte System for a woman.

Section 3 introduces the actual situation in Japan Women's University such as athletic meet and describes the teachers who instructed in these performances.

Keyword: Naruse Jinzo, Japan Women's University, women's higher education, "the good manners exercises", Delsarte System

1. 日本女子大学校創設者・成瀬仁蔵（1858-1919）^{注1)}

成瀬仁蔵は米国留学中の日記に、「吾生涯^{なすべき}ニ可成事」として、「吾目的ハ吾天職ヲ終ルニアリ。吾天職ハ婦人ヲ高め徳ニ進ませ力と智識鍊達^{あた}を豫ヘアイデアルホームヲ造らせ人情を敦シ、国ヲ富し、家ヲ富し、人ヲ幸ニし、病より貧より救ヒ、永遠の生命を得させ、罪を亡ボシ、理想的社会ヲ造ルニアリ。（人類改良モアリ）」（成瀬、1974a：504、ルビ・片桐）などと、壮大な人生の目的を、幾度となく記した。成瀬にとって、女子教育は、国家富強のため、理想社会の創造のため、さらには人類改良という、いささか誇大妄想とも言えるような理想実現のための第一歩であった。

成瀬はまた、青年時代を振り返って、「私も男の一匹であつてアンビツションが在つた。何とならば私の国からは今の伊藤とか山縣とか云ふ様な人が志を立て、身を起し天下の政治を左右して居るのである。自分も人と生れたのであるからには大に志を立て、世界を動かす様な事を仕たいと思ひました。」（成瀬、1976：581）とも語っている。

成瀬のAmbitionの原点は、彼の出生地・周防国吉敷村（現・山口市吉敷）にある。吉敷村は、長州・毛利一門六家の一つ吉敷毛利家のお膝元で、この地からは多くの倒幕の士が輩出した。成瀬が良く知る年長の青年たちも、こぞってこれに参加した。成瀬もまたこれに加わることを願ったが、年少のゆえに、毛利家家

臣である父親はこれを許さなかった。

倒幕に参加した先輩たちが、明治維新を成し遂げたとき、年少のためこれに参加できなかった成瀬は、先輩たちとは別のかたちで、「世界を動かす様な事を仕たい」と思った。これが成瀬のAmbitionとなった。

17歳で山口県教員養成所（現・山口大学教育学部）に入学し、卒業後、県内の小学校教員をしていた成瀬は、たまたま帰郷した同郷の先輩・澤山保羅（馬之進）と出会い、その強い影響を受けた。

成瀬の5歳年長の澤山も、倒幕運動に参加した。元服に達していなかった澤山は、兵士としてではなく鼓手として、これに加わったのだった。維新後、神戸に出て英学を学び米国に留学した澤山は、クリスチャンとなって保羅と改名し、帰国した。クリスチャンとして、より大きな目的のために生きること、澤山の生き方は、成瀬を強く動かした。

澤山に同道して大阪に出た成瀬仁蔵は、澤山から基督教の洗礼を受けた。澤山とともに梅花女学校（現・梅花女子大学）の創設に参加し、その主任教員を務め、『^{おんな}^{つとめ}婦女子の職務』を出版した。女子教育との初めての出会いであった。

やがて、学校の経営方針をめぐる意見の食い違いもあって、教員を辞職し、大和郡山で伝道活動に専念した。そして1886年、牧師として新潟に赴任した。

その新潟で、成瀬は、地元有力者の要望を受けて新潟女学校創設の中心を担い、再び女子教育に従事することになった。他方、1888年に起こった北越学館事件によって内村鑑三と対立した成瀬は、改めて、キリスト教を研究するために、米国留学を希望するようになった。

1891年1月、ボストン近郊のアンドーヴァー神学校に入学した成瀬は、キリスト教研究を進めるとともに、師事したW.J.タッカーの指導によって、当地の女子高等教育にも強い関心をもった。1892年9月には青年心理学の権威スタンレー・ホールが学長を務めるクラーク大学に移り、その直接の指導を受けた。ホールは、女子教育についても研究していた。

1894年1月、丸3年の留学を終えた成瀬は、女子大学創設の決意を胸に、帰国した。

帰国した成瀬は、1896年2月に『女子教育』を出版して、広く、女子高等教育の必要を訴えた。そして財界・政界等多くの支援を得て、1901年4月、ようやく日本女子大学校の創設にこぎ着けた。

成瀬は、「天職」を持つ女性の育成をめざした。当時の日本で、女性の主要な「天職」は、「良妻賢母」であったが、成瀬は、それに限るものではない、と考えた。妻や母にならなくても、女性が「人として」生きることのできる専門的力量的育成こそ、女子大学創設の目的だと、考えた。

日本女子大学校は「普通教育」（教養教育）を重視するとともに、「専門教育」にも力を入れた。日本女子大学校は、英語名で、当初から、Collegeではなく、Japan Women's Universityと名乗った。

成瀬は、実践や活動を重視した。「普通教育」と「専門教育」とを対立させるのではなく、自ら学び自ら動く、自学自動主義の教育によって、両者は一体化できる、と考えた。専門教育では実験や実習が積極的に採り入れられ、普通教育の一環として、学生の自治的活動が奨励された。音楽や演劇を披露する「文芸会」や、後述する運動会が、学生の運営によって盛んに行われた。

成瀬は、米国でのキリスト教研究などをもとに、キリスト教を含むより大きな宗教が必要だ、と考えるようになった。成瀬は、客観的な認識の世界を超えた、信仰の世界の存在を認めたくて、いかなる宗教も、瞑想（自念）することによって、絶対的な「帰一」の境地を得ることができる、と考えた。姉崎正治や渋沢栄一とともに帰一協会を組織し、日本国内だけではなく、賛同者を募って、欧米への旅にも出た。インドのタゴールとも親しく交流した。

成瀬は、7歳で母親を、16歳で弟と父親を、相ついで失った。そのためであろうか、成瀬は、自らの健康に人一倍気をかけるとともに、女子学生の健康にも深い関心を持った。成瀬が日本女子大学校の教育に、積極的に体育を採り入れたのは、そのためでもあったろうと思われる。

2. 成瀬仁蔵と体育^{注2)}

成瀬が留学した19世紀後半の米国は女子高等教育の発展期で、女性の大学入学者が急増した。これに対して、高等教育は女性の身体に悪影響を与えらるゝとして、批判する動きも起こった。

こうした動きに多くの女性は反発し、女子カレッジでの体育教育への関心が高まった。成瀬もこのような動向に注目した。

留学3か月後の1891年4月にはウエルズリー・カレッジに1週間滞在し、教育の実情をつぶさに観察した。ウエルズリーの第2代学長に就任したアリス・パーマーは、ハーヴァード大学の体育部長サージェントの協力を得て、積極的に体育を奨励した。学生たちに少なくとも1日1時間の戸外活動を求めた。

しかしウエルズリー・カレッジに滞在した成瀬は、その滞在記で、建物・設備等は立派だが、「本校の一大欠点と思ふものは、他にあらず、生徒の余りに学事に偏し、体育を怠る事也」(成瀬、1974b:224)と批判している。成瀬が滞在した時、アリス・パーマーは学長をすでに退任した後だったが、女性への体育の奨励が順調ではなかったことを窺わせる。

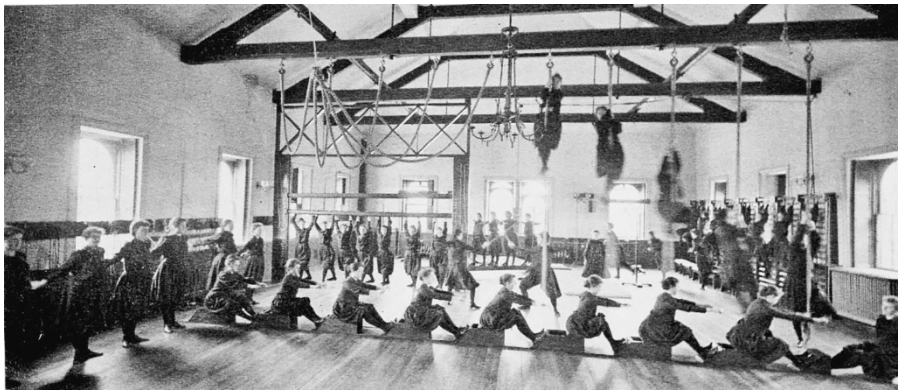


写真1：ウエルズリー・カレッジでの体操授業

成瀬はさらに1892年の年末、スプリング・フィールドのYMCA国際訓練学校に滞在し、バスケットボール創始者の一人ルーサー・ギューリックから直接これを学んだ。ギューリックは冬季に屋内でできる競技として、若い教員のネイスミスと協力して、バスケットボールを考案したのだった。

成瀬とルーサー・ギューリックとの関係は奇縁であった。そもそもギューリック家は、宣教師一家として日本との関係が深い。ルーサー・ギューリックの叔父オラメル・ギューリックは宣教師として新潟に滞在し、澤山保羅とも親交が深く、成瀬も良く知っていた。また兄のシドニー・ギューリックも日本との縁が深く、のちに同志社大学教授となり、成瀬が熱心に取り組んだ帰一協会の活動に積極的に協力した。日米友好のために「青い目の人形」を贈る活動をしたことでも知られる。

成瀬は帰国後、一時校長を務めた梅花女学校でさっそく、バスケットボールを「^{マリカゴ}球籠遊戯」として採り入れた。日本におけるバスケットボールの歴史では、成瀬のあとに同じYMCA国際訓練学校に留学した大森兵蔵が、初めて日本に紹介した、とされるが、これは男子競技のみに注目した見解に過ぎない。ちなみに大森兵蔵は一時期日本女子大学校の教授を務めたことがある^{注3)}。

帰国後、成瀬仁蔵が出版した『女子教育』は5章構成で、第1章「女子教育の方針」、第2章「知育」、第3章「徳育」、第4章「体育」、第5章「実業教育」からなる。

総頁数253の内、それぞれ30、86、61、60、16頁が割り当てられているが、体育に、知育・徳育とほぼ同

分量の60頁が当てられ、いかに体育を重視していたかが分かる。

成瀬は、第4章体育の第1節「体育と知徳両育との関係」において、「教育を分て、知徳体の三育とすれども、其实孤立分離すべきものにあらざるや論を俟たざるなり。蓋し教育は三にして一、一にして三なり。著書は之を称して、教育の三位一體と謂ふ。」(成瀬、1974c：119、傍点・原文。以下同じ)と述べた。

このように体と知・徳を一体的に捉えるのが、成瀬の基本的な人間観であり教育観だった。

第2節以下「女子体育の本邦に必要な所以」「本邦体操の改良振起の必要」「体育略史」を述べたあとで、第5節の「欧米現行の体操法」では、各国で行なわれている体操法を比較考察した。

成瀬によれば、ドイツ式体操法は、身体全体をバランスよく発達させるためにきわめて合理的にできているが、体操する楽しさに欠け、「兎に角乾燥無味なるは是れ独乙体操の最大短所」(成瀬、1974c：130)である。

ついでスウェーデン式体操は、身体の諸器官の発達を考慮して科学的なのだが、教師の指示に従うことが重視され、「その弊や、生徒は常に教師の号令に注目するが故に、注意力を過度に用ふる」(成瀬、1974c：134)ことになる。

これに対してフランス人のデルサートが発明した「表出体操」は、「凡て身体の動作は意味を表出するものなり」という考え方に基づいている。これによれば、すべての身体の動作を意志に服従させ、すべての身体動作が意味を表出することによって、すべての身体動作を優美ならしめることができる。

したがって成瀬によれば、「デルサート式体操は筋肉を筋肉の為に健全ならしむるにあらずして、別に之を要する目的あり。即ち意志と神経系と一致共働するを目的として、身体を練習するにあれば、是れ一種の能弁術と謂ふべきもの」である。したがってこの体操のみによって身体を強壯にすることはできないが、「一種の容儀体操として女子に課するときには、亦大に益する所あるや、疑ふべからざる」(成瀬、1974c：135)ことになるのではないか。現に、この体操は米国の女子大学で採用されるようになっている。

成瀬は、女性の体育の方法として、単に筋肉を鍛えるためではなく、身体を優美にするデルサート式体操に注目した。これなら、とかく体育の授業を忌避しがちな学生たちも喜んで参加するであろう。

無味乾燥の鍛錬よりも、楽しく、自発的に心身を発達させること、すなわち自学自動主義こそ、成瀬の基本的な教育観であった。

成瀬はさらに、第6節以下で「体育の目的」「方法」「本邦女子体育の振起策」について述べたが、バスケットボールについて、「我校に採用せる球籠遊戯の如きは、多数の生徒を同時に休養せしめながら活発の気象と、健全の身体とを養ふに達するものなり」(成瀬、1974c：144)と言及した。ここに言う「我校」とは、梅花女学校のことであるが、いずれにせよ、「活発な気象」をもって楽しみながら心身を鍛えるのが、成瀬の基本的な体育観で、バスケットボールは日本女子大学校でも、学生たちの人気競技となった。このようなゲーム形式の競技活動は、日本女子大学校の体育授業に、積極的に採り入れられた。

3. 日本女子大学校の「容儀体操」

(1) 学科課程のなかの体育授業

1901年に創設された日本女子大学校では、当初から体育の授業が重視された。家政・国文・英文の全3学部共通に、各学年週合計28時間の授業時間の内、3時間の「体操」が課された。

「体操」は、「普通体操」「遊戯体操」「教育体操」「容儀体操」に分けられた。課外で体育を指導した平野はまは、同校の機関誌『学報』で、これらの意義について次のように説明している(平野、1903)。

「普通体操」は、普通の体操とスウェーデン式体操である。その他に器具を使った英国式の体操も行なう。

「遊戯体操」は、テニス、女子バيسボール、クロッケー、ホッケー、バスケットボール、テザーボール(竿毬)等のほか縄跳び、追羽子、千鳥競争等の楽しい競技である。これは「生徒をして各自意志の向ふ処好む処に従ひ、愉々快々の間に、身体を發育せしめ、万事を忘却して、精神の勞を慰せしむ」ことに役立つ。

「教育体操」は、目下、自転車運動と薙刀の練習がある。これらは「如何なる危険に遭遇するも、機に臨み、変に応じて、判断を誤らず、沈勇にして而も敏捷、活発なれども軽躁乱暴に流れず、体力と胆力を兼ね養ひ、筋肉を敏活自在ならしむる」ことを目的とする。

最後に、容儀の教育のためには小笠原流女礼式や石州流の茶の湯があるが、「容儀体操」としてはデルサート式を採用する。デルサート式は、ともすれば相反しがちな「身体の健康」と「風采の優美」とを両立させるものであり、「其一挙手一投足にも、何等かの意味を表はすものなることを教へ、之を練習せしめて高尚優美の度を養成せしむるを目的とする」。

平野は、「蓋し人をして活動せしめんには、先づ之を愉快ならしめざるべからず。愉快に活動せしめんには、先づ自由を与へざるべからず、即ち自動的に活動せしめざるべからず」と、とかく苦痛に耐えた鍛錬になりがちな体育とは、全く異なる考え方を示した。これが、成瀬の主張する自学自動主義に基づくものであることは、言うまでもない。

(2) 体育会の結成

さらに日本女子大学校では、1903年に課外体育のための「体育会」を組織した。この意義を説明した英文学部教授松浦政泰によれば(MM生、1904)、これは、米国のウエルズリー・カレッジのBoard of healthをモデルにしたものである。規約では、「本邦女子の体育を研究し、本校生徒の体操遊戯を奨励する」ことを目的として、「容儀体操部」「教育体操部」「競技体操部」「園芸牧畜部」の4部を置くこととなっている。

これらは、基本的に、平野浜の説明にある学科課程の体操4分野に対応したものだが、園芸牧畜部が含まれているのがユニークである。体育が、学生の健康増進(文字通りHealth)の一環としてとらえられていることの表れである。

そして容儀体操部にはデルサート会とダンス会が、教育体操部には自転車会と薙刀会が、競技体操部にはローン・テニス会、バスケットボール会、ホッケー会、ゴルフ会が、園芸牧畜部には園芸会と牧畜会が設けられた。

松浦によれば、デルサート会は、「専ら平野教諭之れが教授を担当せられ、本校の創立と同時に始まり、毎年の運動会には必ず加へらるゝ例となり居り、本年の如き非常なる喝采を博した。会員は30名。他方、ダンス会は、平野らの指導により最近始めたが、会員はおよそ232名と言う。

その他、ローン・テニス会の会員は大学部86名、高等女学校88名で、平塚明(らいてう)や長沼(高村)智恵子が入部していた。バスケットボール会は会員26名、自転車会は大学・高女併せて会員200名の人気だった。またホッケー部は、英国人の英文学部教授フィリップスが、ゴルフ会は、米国留学でゴルフに親しんだ東京帝国大学教授で講師として博物学を教えた渡瀬庄三郎が指導した。

(3) 運動会での「容儀体操」

日本女子大学校の体育教育の成果は、創立以来毎年10月に開かれた運動会で披露された^{注4)}。

校長成瀬仁蔵も運動会に熱心だった。後述するように日本女子大学校の体育指導に中心的な役割を果たした白井規矩郎は、次のように回想している。

「運動会といへば先づ成瀬校長を追想します。校長は学生の体育には不断注意を払はれ熱心に運動を奨励せられました。何にしろ実践倫理と体操とは必修科目中の最主要とせられ是れには恒に全幅の注意を払はれ従て毎回の運動会には校長と松浦運動部長とは主として競技方面を私は舞踏的体操を掌りま

したが校長は大概午後四時すぎ外部の訪問を終つて帰校せられますと一瞬の休憩もせられず直ちに学生を集めて親しく指導せられ日の暮れるのも知られない否時には暗い中でも練習を続けられました。(中略) 併し校長は運動の競技にのみ偏する事を非常に厭はれ一方には美的体操や遊戯体操の研究を私に一任されて其資料を広く欧米諸国に牽め、これを校訂塩梅して平素の教材に供する様な希望を話され、其中に就て充分に選択したものを毎回の運動会に一種なり二種なりを演出するやうにして居つたのです(後略)」(白井、1935、ルビ・片桐)

以下に示すのが現存する1903年の第3回運動会のプログラムである。

写真2：日本女子大学第3回運動会プログラム

午前の部と午後の部に分れ、合計32種目と、盛りだくさんだが、競争等の個人競技よりも、勝敗のない集団競技がほとんどを占めるのが特徴的である。そして、中段の注記に見るように、欧米で考案されたものを「更訂」したものが多。

このうち、身体表現に関わるいくつかについて紹介しよう。

まず第16のデルサート式容儀体操は大学部学生24名で演じられた。

1903年11月発行の『女鑑』は、運動会の様子を伝える「女子大学の運動会」という記事を掲載したが、容儀体操について、次のように紹介している。

「亜米利加に流行するもの、弁士、俳優などは是非に稽古し置くものにて、舞踏の初歩。大学部の生徒二十四名、白妙の洋装に、白蝶のリボンを髪に付、悠々乎として、練出し、群衆の目も綾に打守る間、彼等一同は軟かに体を反らして天を仰ぎ、これより、幾多の変化を経て最後に二人宛一組になりて、調子克く引退きぬ。物珍しき遊戯なり。」(浪滄生、1903：65)

この実際の様子を以下の写真で示しておこう。

写真3は1903年12月に発行された『学報』第2号に掲載されたもので、運動会とは別の機会に学内で撮影

されたものであるが、その様子が分かる。写真4は、翌年の第4回運動会の写真である。第3回と同じ振り付けで行なわれたのであろう。

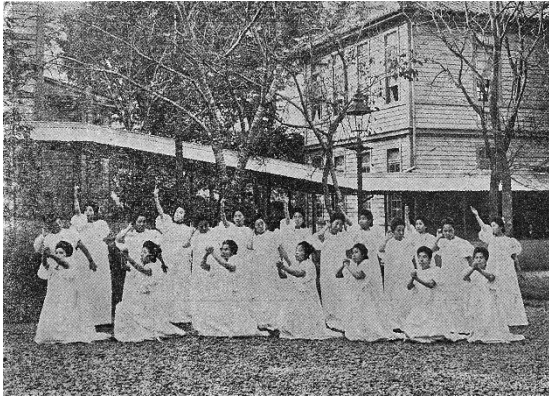


写真3：デルサート式容儀体操（1）



写真4：デルサート式容儀体操（2）

第4回運動会でのデルサート式容儀体操について、その年の『女鑑』には次のような記事がある。

「此は米国の詩人E.A.Poe氏の傑作なるThe Raven（烏）の詩吟をしつゝ、私人デルサート氏の創意になれる表情体操に基づき、それを動作にあらはせるもの、由にて、色は淡紅色の古代希臘の服装をまとひたる廿四名の妙齡の婦人が、ピアノの弹奏につれて、軽く跳り、緩く舞ふ風情巧妙といふの外なかりき。」（無署名、1904：61）

デルサート体操についての日本女子大学校の説明では、「これ我等が重きを置ける体操の一にして、世人も本校体操の特色の一とする所」「優雅を目的とし、一挙手一投足の間に各種の感想を表彰するか如く、仕込みたるものにして、頗る科学的組織なり」というのだが、ピアノの伴奏に合わせて学生がポーの詩の日本語訳を朗唱し、これによって全員がゆったりと動く演技は、参観者の注目を集めた。

物珍しさのためか、『女鑑』のほか『女子之友』『婦人界』『実業之日本』などの雑誌や『報知新聞』『ジャパン・タイムズ』などの新聞に参観記事が載った（美軒子、1903）。

なおRavenは普通のカラスよりも大きいワタリガラスのことで、不吉の兆しとされると言う。『学報』第4号にはこの詩の訳が載っている（魔々子、1904）。

第25は英文学部学生14名による、フランス遊戯を改良した「第二虹霓舞」である。



写真5：第二虹霓舞（1）



写真6：第二虹霓舞（2）

虹霓こうげいとは虹のことで、七色の長い布を7名の学生がそれぞれ持って踊った。第3回運動会では2組・計14名で踊ったが、第4回運動会では4組・計28名で踊った。写真6はそのときのものである。写真5の場合、7本の布を合せ持った学生が中心に立っているが、具体的な踊り方等は不明である。『学報』第2号と第4号の記事には、それぞれ、「極めて優美」「頗る艶麗を極む実に趣深き舞」とある。

第27は高等女学校3年生100余人による「ローマ式」の「アマゾン」である。



写真7：アマゾン (1)



写真8：アマゾン (2)

「アマゾン」とはギリシャ神話に出てくる女性だけの戦士のことで、白鉢巻に白いたすきの扮装で、戦場での動作を演じた。『学報』第2号の記事によれば、次のようである。

「一同無手にて普通の徒手体操を数回演じては、其間に、弓を引き、槍を投げ、石を擲ち、馬に乗るなどの動作を挿む所、多少の可笑みなきにあらず。驚き怪しみて天の一方を眺むるは、大敵の忽焉なげうとして襲ひ来るにやあらむ。首を垂れて悲哀に沈めるは、思はぬ不覚を取りて慚ぢらひしにやあらむ。いと嬉れしげて両手を高く翳かざし、凱旋の意気、天を衝く所にて終りぬ。」(美軒子、1903：195、ルビ・片桐)

『女鑑』はこの演技を「満場の観客、皆拍手し、当日第一等の遊戯と賞しぬ」(浪滄生、1903：66)と伝えた。デルサート式に比べれば動作が活発で、意味も分かりやすかったであろう。

「アマゾン」は好評で、その後もいくつかのバリエーションで続けられた。『家庭週報』第20号には「或は徒手とするもの、或は槍と楯とを持てするもの、或は戦斧とでも云ふ一種の斧を以てするもの、又た素人演劇として出来る様に仕組んだものなど、私の知て居るもの斗りぼかでも五六種は御座ります」とあって、具体的な動作を紹介している(準繩子、1905)。

なお写真7は、運動会とは別の機会に校庭で撮影されたもの、写真8は『女学世界』第4巻第4号(定期増刊「女学校生活」)(1905年3月)に掲載されたものである。

第29「花売り」はフランス遊戯をもとにしたもので、高等女学校5年生40人余りによる演技である。

『女子之友』は「体操ではないが遊戯として実に高尚で且つ優美で艶麗で、殊に高青邨の花売りの詩を一斉に歌ひしに至ては主も客も全く詩化し去つた、終つて帰りけに花を籠より一枝づゝ客に与へたのは



写真9：花売り

愛嬌があつた」と紹介した（無署名、1903：99）。

高青邨は中国・明代の詩人で、その詩は、日本でも江戸から明治にかけて人気があつたという。

その他『女鑑』は「一様に菊花の籠を頭上に頂き、種々に都雅なる手踊を為す所、婉にして都踊りの活発なるに似たりき。』、『読売新聞』は「一同菊花を盛れる花籠を、頭に載せて右手に支へ、時々左手に交換し、種々のマーチをしつゝ、或は花を改め、或は花を撈しり、高青邨の売花詞を吟じつゝ、売り歩るくなり。』、『実業之日本』は「其花を見物人の子供に分与しつゝ、帰り行く所、頗る愛嬌があつた。」と報じた（美軒子、1903：196）。

(4) 指導した教師たち

①白井規矩郎（1870-1951）

このような日本女子大学の体育教育を指導した中心人物は、開校以来1944年まで、45年間の長きにわたり教授を務めた白井規矩郎であった^{注5)}。

白井は1889年に音楽取調掛（現・東京芸術大学音楽学部）を卒業し、各地の師範学校の音楽教諭等を経て、1899年から日本体育会体操練習所（現・日本体育大学）で教え、さらに成女学校（現・成女高等学校）でも体育を教えた。音楽教育のみには飽き足らず、これを身体活動に生かすことを考えたのである。

白井は、成瀬仁蔵の要請により日本女子大学教授となつたいきさつについて、次のように回想している。成瀬と白井の出会いのみならず、日本女子大学に容儀体操が導入された経緯が具体的に分かるので、少々長くなるが全文引用しておこう。

「何時でしたか日本女子大学の設立前に、成瀬先生が態々成女学校に私の体操を来観せられ、其方法の美的穩健なる如何にも女子独特の体操なるに感ぜられた様でした。

併し先生も新規のものを科目に加へるといふ事には極めて慎重なる態度を執られた様で、其後暫く何の御話もありませんでしたが、或日＝明治三十三年十二月か三十四年の一月頃でしたか臚の記憶です＝突然先生から一橋の学士会館まで午後六時までに来る様との御書面、同時刻に伺つて見ましたら、先生の他に三宅秀博士、三島博士、高木兼寛博士、大澤謙二博士、嘉納治五郎先生など、体育衛生に関する当時の権威者来集せられ、其処へ私は席末を汚した訳で、是は女子の体育に付いて如何なる方法如何なる施設が現代の女性に好適なるやに付いて、各位の腹蔵なき高見を承り度との事で、此間先生には各位の高説を終始熱心に聴取せられ、私も驥尾に附して女子生理的訓練法施行の成績を述べ十時過ぎ散会いたしました。

其後先生は三回斗り私の宅へ御見えになり、それとなく家庭の有様など視察せられ、終に文部省とも相談して、君の体操を試みることにした故、自分の学校へも一週二三回来られ度といふ事になりましたので、先生の細心な配慮と綿密な注意に深く敬服しました。

始めて登校しましたのが明治三十四年五月で、是が抑も先生に知遇を得た始りで、又た我国に真の女子体操を正科として加へられた嚆矢です。」（白井、1939）

白井規矩郎は1901年12月に『新式女子表情体操・第一集』を出版した（白井、1901）。これは日本女子大学附属高等女学校での実践に基づくもので、白井は日本女子大学の教師に就任後ただちにその成果を公表したのである。

「凡例」によれば、標題にある「表情体操」は、「容儀的訓練」と「表情的訓練」とに分れる。前者は後者の基礎であるから「能く之れに熟したる後、表情的訓練に移るを要す」。そして同書が示す容儀的訓練は、「私人デルサート氏の創定する処にして、一にデルサート式体操と称し、専ら女子に施行すべき美的体操なり」と言う。

以下、本文で示される「容儀的訓練」は、「身体の矯正」「氣息の訓練」「調齊的訓練」の三つに分けられ

る。「身体の矯正」は「総て習慣より到来する一切の悪弊を矯正するに欠くべからざるもの」で、全部で28の動作である。「氣息の訓練」は呼吸法で、時に発声を伴う。「調齊的訓練」は全24で、「身体の矯正」よりも大きな動作である。これらの動作は、デルサートが示したものをそのまま翻訳したものだと言う。

これに対して、基礎的訓練の後に行なう「表情的訓練」は、白井規矩郎自身が創案した「流水の曲」と題するストーリー性を持った舞踊で、音楽の伴奏や歌と共に踊る。

白井は、さらに2年後の1903年10月に『新式女子表情体操・第二集』を公刊し（白井、1903）、自ら創作した「孤鶴」と「菊の露」の二つの舞踊を世に問うた。白井の説明によれば、「流水の曲」は一人または数人で、「孤鶴」「菊の露」は二人以上で踊るものである。白井は、前者を「単純式表情」、後者を「聯合式表情」と呼んだ。白井はこれらを、写真や楽譜付きで紹介している。

白井によれば、「容儀的訓練」はもちろん、「表情的訓練」を含む「表情体操」全体がデルサートの考案に基づくものである。しかも第一集の「表情的訓練の目的」の項（白井、1901：2）で示されたデルサート体操についての説明自体、成瀬の『女子教育』の文章をほぼそのまま踏襲しており、白井のデルサート体操採用が、成瀬の示唆によるものであることを窺わせる。第二集には「表情体操の発明者デルサート氏の略伝」と題して、デルサートの小伝も載っている^{注6)}。

②平野^{はま}浜（1867-1919）

先述したように、体育会のデルサート会を指導したのは平野浜であった。

平野はフェリス女学校（現・フェリス女学院大学）を経て1890年にフェリス和英女学校高等科を卒業し同校で和漢学と女礼、課外でデルサート体操を教えた。フェリス和英女学校ではこのころすでにデルサート体操が導入されていたのである。

成瀬と共に日本女子大学創設に尽力し成瀬没後第二代校長に就任した麻生正蔵は、巖本善治の紹介でフェリス和英女学校に平野を訪ねたとき、平野がちょうどデルサート式体操を指導しているところで、これを参観した、と回想している（麻生、1919）。

平野は成瀬の懇請により、1901年4月日本女子大学開校と同時に、寮監および附属高等女学校教諭に就任し理科、数学、体操、英語を担当した。精神教育にも献身して、のちに大学で英文学部教授と寮監主任を兼務した。体育会でデルサート会、ダンス会を指導したほか、体育教育全体にもかかわったことは先述の通りである。実技の指導は、白井よりも平野が行なった、との証言もある（馬場、2014：107）。

平野は通訳をするほど英語が堪能でもあったが、1919年7月、成瀬のあとを追うように脳溢血で急死し、学内に衝撃を与えた（日本女子大学、2001：262）。

③松浦政泰（1864-1919）

もう一人日本女子大学の体育教育に貢献したのは運動部長を務めた松浦政泰であった。

松浦は、1887年同志社英学校（現・同志社大学）を卒業し同志社女学校（現・同志社女子大学）教頭を経て1901年5月日本女子大学英文学教授および附属高等女学校教諭に就任した。のち英文学部主任、附属高等女学校主事をも務めている。

松浦は同志社時代から体育・スポーツに関心を持ち、同志社女学校での体育教育を推進した。体育を専門としたわけではないがスポーツ愛好家であった。世界の遊戯を847種目集め、これを「単独遊戯」「双対遊戯」「団壘遊戯」「団体遊戯」「余興遊戯」の五つに大別して分類整理し、その具体的な遊び方を紹介した『世界遊戯法大全』（博文館、1907年）という大著もある。

また、明るく率直で、ユーモアもあり、学生たちに愛されたと言うが、*A Talking Monkey*という英和対訳本に『我輩は猿である』（集文館、1916年）という題名を付けているところにもそれが表れていると言えるだろう。

松浦政泰は成瀬が没する直前、1919年の1月に病没した（日本女子大学、2001：310）。

写真出典

- 写真1：Jean Glasscock ed., *Wellesley College, 1875-1975: A Century of Women*, Wellesley College, 1975. p.160.
- 写真2：日本女子大学成瀬記念館蔵。
- 写真3：『学報』第2号、1903.12.22.
- 写真4：『学報』第4号、1904.12.9.
- 写真5：日本女子大学成瀬記念館蔵。
- 写真6：日本女子大学成瀬記念館蔵。
- 写真7：馬場哲雄・石川悦子『日本女子大学の運動会史』30頁。
- 写真8：『女学世界』第4巻第4号（定期増刊「女学校生活」）1905年3月、99頁。
- 写真9：日本女子大学成瀬記念館蔵。

注

- 注1) 成瀬仁蔵については、中畠（2002）、同（2015）、新刊では大森（2019）などのほか、私自身にも「成瀬仁蔵の女子大学構想と米国—Women's Universityの夢—」、『愛知教育大学研究報告（教育科学編）』、第69輯、2020年3月刊行予定、「日本女子大学校の展開—女子総合大学を目指して—（上）」、『人間研究』第56号、日本女子大学教育学科の会、2020年3月刊行予定、など、多数の論文がある。
- 注2) 成瀬仁蔵の体育観と日本女子大学校の体育教育については、馬場（2014）がある。併せて参照されたい。
- 注3) 1909年度用の「日本女子大学校規則」（日本女子大学成瀬記念館、1999）の職員名簿に、教授として大森兵蔵の名前が記載されている。なお本井（2019）の日本女子大学の項に大森兵蔵の紹介がある。
- 注4) 日本女子大学の運動会については、馬場・石川（1982）がある。
- 注5) 馬場（2014）のほか、村山（2000）第2章が白井規矩郎について論じている。なお同書はデルサート式体操の導入過程についても詳しい。ちなみに白井規矩郎が、教授として日本女子大学校の職員名簿に載るのは1904年度用「日本女子大学校規則」（日本女子大学成瀬記念館、1999）からである。
- 注6) なお、白井規矩郎には音楽関係のものを含め、多くの著書がある。そのうち、のちに復刻されたものに白井（1893）、同（1923）がある。ちなみにYouTubeには白井規矩郎が作曲した小樽潮陵高校の校歌がアップされている（2019年12月7日確認）。

文献

- 1) 麻生正蔵, 1919.8.8, 「平野濱子女子の霊に別れを告ぐるの辞」, 『家庭週報』527, 日本女子大学校内桜楓会:東京, 2面 (麻生正蔵, 1992, 『麻生正蔵著作集』, 日本女子大学成瀬記念館:東京. に収載)
- 2) 馬場哲雄, 2014, 『近代女子高等教育機関における体育・スポーツの原風景—成瀬仁蔵の思想と日本女子大学校に原型を求めて—』, 翰林書房:東京.
- 3) 馬場哲雄・石川悦子, 1982, 『日本女子大学の運動会史』, 日本女子大学体育研究室.
- 4) 美軒子, 1903.12.22, 「秋季運動会の記」, 『学報』2, 日本女子大学校:東京, 180-202.
- 5) 平野はま^(ママ), 1903.7, 「本校の体育状況一斑」, 『学報』1, 日本女子大学校:東京, 198-205.
- 6) 準繩子, 1905.3.25, 「アマゾンの運動法」, 『家庭週報』20, 日本女子大学校内桜楓会:東京, 4面.
- 7) MM生(松浦政泰・片桐), 1904.12, 「我が校の体育」, 『学報』4, 日本女子大学校:東京, 128-140.
- 8) 魔々子, 1904.12, 「第四回秋季運動会と其批評」, 『学報』4, 日本女子大学校:東京, 140-157.

- 9) 本井康博, 2019, 『新島襄の教え子たち (ジャンル別)』, 同朋舎: 京都.
- 10) 無署名, 1903.12.3, 雑報「日本女子大学校運動会」, 『女子之友』147, 96-101.
- 11) 無署名, 1904.12.1, 「日本女子大学運動会」, 『女鑑』14(13), 60-63.
- 12) 村山茂代, 2000, 『明治期ダンスの史的研究—大正2年学校体操教授要目に至るダンスの導入と展開—』, 不昧堂出版: 東京.
- 13) 中寫邦, 2002, 『成瀬仁蔵』, 吉川弘文館: 東京.
- 14) 中寫邦, 2015, 『成瀬仁蔵研究—教育の革新と平和を求めて—』, ドメス出版: 東京.
- 15) 成瀬仁蔵, 1974a, 「日記」(1891年8月10日の条), 『成瀬仁蔵著作集』1, 日本女子大学: 東京, 503-504.
- 16) 成瀬仁蔵, 1974b, 「ウヰヰズレー女子大学觀察略記」, 『成瀬仁蔵著作集』1, 日本女子大学: 東京, 221-226.
- 17) 成瀬仁蔵, 1974c, 「女子教育」, 『成瀬仁蔵著作集』1, 日本女子大学: 東京, 31-155.
- 18) 成瀬仁蔵, 1976, 「自ら直接社会に立つて働かんより斯かる人物を養成すべき根本をつくせ」, 『成瀬仁蔵著作集』2, 日本女子大学: 東京, 579-584.
- 19) 日本女子大学, 2001, 『日本女子大学学園事典—創立100年の軌跡—』
- 20) 日本女子大学成瀬記念館, 1999, 『日本女子大学史資料集第五—(二)—日本女子大学校規則〔明治三五—四二年〕』
- 21) 大森秀子, 2019, 『成瀬仁蔵の帰一思想と女子高等教育—比較教育文化史的研究』, 東信堂: 東京.
- 22) 白井規矩郎, 1893, 『新編小学教授術・唱歌科』, 金港堂: 東京 (『音楽教育史文献・資料叢書』第8巻, 大空社, 1991として復刻)
- 23) 白井規矩郎, 1901, 『新式女子表情体操・第一集』, 育成会: 東京 (『女子体育基本文献集』2, 大空社, 1994として復刻)
- 24) 白井規矩郎, 1903, 『新式女子表情体操・第二集』, 育成会: 東京 (同上)
- 25) 白井規矩郎, 1923, 『韻律体操と表情遊戯』, 敬文館: 東京 (『音楽基礎研究文献集』第5巻, 大空社, 1990として復刻)
- 26) 白井規矩郎, 1935.11.15, ハガキ回答「印象に残る目白の運動会」, 『家庭週報』1288, 日本女子大学校内桜楓会: 東京, 6面.
- 27) 白井規矩郎, 1939.3.3, 「成瀬先生に知遇を得た始り」, 『家庭週報』1423, 日本女子大学校内桜楓会: 東京, 2面.
- 28) 浪滄生, 1903.11.15, 「女子大学の運動会」, 『女鑑』13(22), 64-66.